

## 第2回 東京都北区地域保健福祉計画策定委員会 議事録

日 時：平成29年3月21日（火）午後2時00分～午後4時01分

場 所：北とぴあ スカイホール

### <次第>

- 1 開 会
- 2 ワークショップ実施結果について
- 3 アンケート調査結果について
- 4 施策体系案について
- 5 計画策定スケジュールについて
- 6 閉 会

### <出席者>

#### ・策定委員会委員

川村匡由委員長	高野龍昭副委員長	碓井 亘委員	浅野正樹委員
齋藤邦彦委員	渋谷伸子委員	小宮榮次委員	加藤和宣委員
遠藤陽可委員	森 孝時委員	伊与部輝雄委員	浅川謙治委員
都築寿満委員	石原美千代委員	田草川昭夫委員	

#### ・事務局

鈴木啓一地域のきずなづくり担当副参事	菊池誠樹健康福祉課長
飯窪英一健康推進課長	岩田直子高齢福祉課長
小宮山恵美介護医療連携推進担当課長 (代理出席)	遠藤洋子介護予防・日常生活支援担当課長
関谷幸子介護保険課長	田中英行障害福祉課長
	清田初枝健康福祉部参事（生活衛生課長事務取扱）
馬場秀和子どもの未来応援担当副参事	上水流ユキ北区社会福祉協議会事務局次長

### <会議概要>

- 1 開 会（省略）
- 2 ワークショップ実施結果について  
ワークショップ実施結果について、健康福祉課長が説明を行い、以下の意見及び質問があった。

#### ○委員長

出席された方の感想をどうぞ。

#### ○委員

自分で住んでいる地域のこと以外にいろいろな発見があり、勉強になった。これから

の活力が見えてきた。例えば、東洋大学赤羽台キャンパスの開設をきっかけに、若い人をまちに呼びこむ視点など、新しい気づきがあり、参考になった。

#### ○委員

行政側ですでに持っている課題と、参加者の意識、課題が同じ方向性を向いていると思う。「男性が生き生きする場」「世代制度をかきまぜてみる」「大学とのコラボでまちに若い人が来る」ということは、多世代が交流する、いろいろな人間が交流する、こういうまちにしていきたい、それが北区の方向性であるということが参加者の意識にあるのかなと思った。

また、「男性が生き生きする場」という課題は、すなわち北区というのは男性が生き生きしてないのかなと感じ、非常に参考になる意見だった。

#### ○事務局（北区社会福祉協議会事務局次長）

「かきまぜる」ということが大変印象深かった。

地域の方はもう縦割りではなくて、地域共生というのは既に気持ちの中、課題として捉えていて、そういう地域に向かっていかななくてはいけないということ、意識としてあるのだというのを感じた場であった。

#### ○委員長

ワークショップでは、東洋大学赤羽台キャンパスに対する期待が大きかった。東洋大学赤羽台キャンパスについて、東洋大学の高野副委員長からご説明いただきたい。

#### ○委員

赤羽台団地の一画、元中学校があったところに、平成29年4月に情報連携学部という新設の学部ができる。学部定員は約400人だが、4年後には約2,000人の学生が来る見込み。

基本的には福祉ということではなくて、情報を扱ってどういうふうに多分野を結びつけていこうかということ、学ぶ学生が来る。今、どの大学も地域と連携をして研究や教育を行うことを基本にしていますので、ぜひ活用してもらいたい。むしろ学部としても地域の皆さんとつながっていこうという発想がこれから出てくると思うので、よろしくお願ひしたい。

#### ○委員

アンケート結果の、こんなまちにしたいというところで、共感する意見が多かった。私は3歳の男の子が一人いるので、保育など、子ども関連の意見が出ており、特に子育てについて皆さん保育園、待機児童など、同じような悩みを持っていることがわかった。

#### ○委員

ワークショップに参加された方の多くが、行政や地区に求める内容というのはすごく多いと思う。ところがアンケートを見ると、地域活動への参加状況の項目では、「参加

したくない」という回答が最も多いこと、また、生活支援などへの参加意向の項目でも、「やりたいとは思わない」という回答が最も多いなど、どちらかというところ、サービスを求める反面自分が担い手にはなりたくないという人が多いように思われる。

ただ、よく見てみると、支援の前段階というか、家族や友人の相談にのっているかという項目では「はい」が多かったり若い人に話しかけることがあるかという項目でも「はい」が多かったりなど、実はこの前段階のレベルとしてはそれほど低くないのではないかなと思う。実際にはこういうワークショップをはじめ、いろいろな場を重ねていくことで担い手をふやしていく活動が実は大事なのではないかと感じた。

#### ○委員

町会連合会では、多世代交流を進めている。男性の高齢者の参加が課題。男性の高齢者がどうも雰囲気に乗ってこられないというようなこともあって、その人たちの発掘に努めているところ。

#### ○委員長

地域振興部長から北区の町会自治会の現状について聞きたい。

#### ○委員

北区の町会自治会の組織率は大体3分の2、67%である。しばらく前からちょっとずつ右肩下がりで落ちていて、このまま落ちていくことが予想される。23区の中では比較的良いほうという認識だが、マンションができると、オートロックなので勧誘ができないという話をよく聞く。

それから、60歳ぐらいまでの現役で働いている世代はなかなか自分の時間が取れないため、まちのことを何かしたいという気持ちがあっても、参加するに至らないという状況がある。地域振興課では、きずなづくりの担当の副参事ポストが設置されており、セミナー等に力を入れている。代がわりの時代に向けて、現在50代、60代で町会を支えている役員の方を主なターゲットにしたセミナーを実施している。

#### ○委員長

セミナーへの男性参加者の割合についてはどうか。

#### ○委員

セミナーの参加者は、男性のほうが幾分多い感じはする。夜の時間帯にも実施したところ、人数ではそこが一番大勢来たので、多分仕事をお持ちの方でも、夜わざわざ駆けつけてくださった方が、思っていた以上に多くいらっしやった。

#### ○委員長

北区にはおたがいさまネットワークが全体で182団体活動しているが、そのうち136団体が地域のために活動している。

そのほか、町会自治会登録団体で区のほうが補助を出して行っているという事業も、

ことしで6年目になりますけれども63団体ある。町会自治会全体の3分の2は組織化されている。今後、町会自治会が高齢化したときに次の世代の人の受け皿があるかどうか課題。

北区は地域組織化ということでは力を入れている。この組織力を地域保健福祉計画に落とせば、かなり小地域での組織化による地域保健福祉計画の活動の活性化というものにつながってくるのではないか。

#### ○委員

おたがいさまネットワークについて、志茂地区では、一つの町会自治会単位でなくて、連合会自体で担当している。所管は高齢福祉課。

#### ○事務局（高齢福祉課長）

北区では高齢者の見守りを重層的に行っていこうということでおたがいさまネットワークというものをつくっており、町会自治会単位で参加してもらい、区が補助金を出している。対象は約60団体。補助金を受けない団体もある。その他さまざまな活動をしていただいております、それを高齢者あんしんセンターが支援している。

#### ○委員長

北区では地域包括支援センターが17カ所整備されている。そこのリンクによってかなり地域保健福祉計画の方向性が見えてくるのではないか。都下の立川では、地域包括支援センターに地区社協を置いて、社会福祉協議会の、社会福祉士の資格を持つ職員が必ず常駐している。

#### ○事務局（高齢福祉課長）

地域包括支援センターを北区では高齢者あんしんセンターという愛称をつけており、平成28年10月から17カ所にした。その管轄区域を地域振興室単位に基本的に合わせるという再編をした。高齢者あんしんセンターと、町会自治会は地域振興室単位で連合町会をつくっているの、連携しながら活動ができる体制を作った。

#### ○委員長

地域包括ケアシステムの強化について、医師会が国から得ている情報のうち、北区で特に参考になるような情報はありますか。

#### ○委員

特別な情報は無い。国の発表どおり。病児保育への取り組みなど子育てしやすいイメージも作りたいところだが、高齢者へのモデル事業が進んでいることもあり、北区では高齢化というイメージが強い。

#### ○委員長

厚生労働省は、地域包括支援センターと連携するような形で、基幹相談支援センター

の設置を検討している。この動きについてどうか。

○事務局（障害福祉課長）

基幹相談支援センターは、高齢者の地域包括支援センターの障害者版という位置づけ。大きく分けて四つの機能があり、総合相談機能、福祉サービス事業者等々の地域のネットワークづくり、権利擁護・虐待防止並びに地方の入所施設や病院からの地域移行及び地域定着支援がある。北区では基幹相談支援センターがまだ構築されてはいないものの、すでに機能している部分がたくさんあるため、今現在ある機能をいかに効果的に効率的にネットワーク化していくかが大事である。

基幹相談支援センターの構築については、区議会、自立支援協議会等の意見を伺いながら検討を進めていきたい。

○委員長

障害者支援という観点で、相談支援、権利擁護、成年後見の関係で意見をいただきたい。

○委員

高齢化の時代に、若い方のエネルギーを持って明るいまちにするためにはどうしたらいいかということで、いろいろな話があり、すばらしいと思う。男性の活躍にも期待したい。しかしながら、住宅地などに公衆トイレが少ない、駅周辺に休憩する場所がないなどの課題はある。そういった目に見えないことを考えていくことが大事。

3 アンケート調査結果について

アンケート調査結果について、健康福祉課長が説明を行い、以下の意見及び質問があった。

○委員

地域活動への参加をどんどん促していくべき。私はボーイスカウト活動に参加しており、赤羽の馬鹿祭りの警護奉仕をやっている。中学校1年生ぐらいの子も目をきらきら輝かせながらやっている。

ボランティアというと、どうしても大きいことを皆さんイメージされているようだが、大小というのはあまり関係ないと思う。町内会で言えば、ごみの集積場をちょっとみずからさっと掃除するとか、冬期の夜警に1日でもちょっとでも参加するだけでも十二分なボランティアだと思う。

地域のリーダーの担い手を探すことももちろん大事だと思うが、実はその小さい積み重ねが大事。小さい積み重ねをボランティアとして表現してもらえるように行政がわも誘導できれば。こんなこともボランティアの一つだという活動が広まってくれば、その中からまたリーダーは自動的に生まれてくる。その一番の起点は多分町内会にあると思う。

○委員長

青少年育成、子育ての関係で、子ども食堂のことなど、意見をいただきたい。

#### ○委員

プライバシーの問題が非常に大きい。昔は地域やPTAで名簿をつくり、それで交流することが頻繁に行われていたが、それを悪用する人たちが出てきたこともあり、どんどん名簿がなくなって、その代わりにメール交換のような、一定の人たちはそれができるけれども、できない高齢者たちがどうしても浮き上がってしまう形式が増えている。

高齢者あんしんセンターが17拠点になったことはすばらしいと思うが、逆に17拠点になったために、今まで近くにあったところに行かれなくて遠くへ行かなければならない人たちも出てきており、こうした問題を解消したほうがいいと思う。

子ども食堂はプライバシーに配慮しながら、地域の子どもたちを対象に月に2回実施している。自治会場所を無料で提供しており、NPOや社会福祉協議会などから支援を受けながら実施している。

いろいろな情報がきちっと伝わってこないことが問題。池田小の事件以降、学校が開放的ではなくて閉鎖的になってしまった。

また、高齢者の方が亡くなると、自治会で一生懸命活動した人たちであっても、密葬にしてしまう。互助会に入っていたとしても、病院の中で決められたところに行ってしまう。そういったことがだんだん地域社会の中で多くなってくるとお互いが疎遠になってしまう。今の自治会を担っている高齢者がいなくなったら自治会はどうなるのか心配している。

若い人たちをどうやって自治会活動に参加してもらうかが課題。イベントだけは参加するけれど、そこから交通安全、防犯、防災といった活動についてはなかなか参加してもらえないのが現状。

#### ○委員長

区民にとって、北区ニュースによる情報の入手が断トツであるというアンケート結果があるが、北社協からの情報についてはどうか。

#### ○委員

北区社会福祉協議会では、「きたふくし」という情報誌を隔月で全戸配付している。区民の、きたふくしの認識度合いは、私どもは非常に高いと思う。

#### ○委員長

社協の世帯会員の組織率についてはどうか。

#### ○委員

組織率までは把握していない。北区社会福祉協議会の会員は民生委員児童委員の皆さんが会員を募っていただいたという歴史的な背景があるが、民生委員の交代により、その民生委員が勧誘した会員がやめてしまうことがある。高齢化等もありこのところ会員数は漸減傾向である。地方によっては全世帯、半ば強制的に加入という自治体もある

と聞いている。

○委員長

民生委員の現場での状況はどうか。

○委員

社会福祉協議会の仕事を理解してもらうことが大変。若い人にもっともっと理解してもらいたい。社協さんが頑張っているのはわかっているので、その一端を担いたい。

○委員長

今までの議論を受けて、医師会、病院の観点からの意見をいただきたい。

○委員

アンケート結果について、日本全体の社会構造がそのまま北区にあらわれているような気がする。病児保育など、力を入れてもらいたい。

また、主治医制度について、できるだけまちの先生を主治医として持ち、それから病院など、3人、4人の主治医がいてもいいだろうと思う。そこで連携を取ってもらおう。範囲としては、地域包括支援センター単位か、さらに細かくするとよい。それにはやはり地域の方の協力が必要。

○委員長

北区に高齢者あんしんセンターサポート医という制度がある。この制度を是非広げていって、できればあんしんセンターなどと連携できるといい。引続き、社会福祉協議会について聞きたい。

○委員

社会福祉協議会という名前は区民に知られているが、何をやっているのかはわからないという指摘を受ける。今月の「きたふくし」134号では、社会福祉協議会ってなんだろうというテーマで特集を組んでいる。

例えば紙おむつの支給や、車椅子の貸し出しといった事業も実施しているが、それは本来の社協の役割ではない。私どもは福祉のまちづくりという表現を使っているが、福祉にかかわる人たちをつないでネットワークをつくって、それで地域福祉を支えていこうという活動が本来の社協の役割だと思っている。

「きたふくし」134号では、子ども食堂のことも書かれている。区から受託している部分もあるが、地域の中でそういう活動をしている皆さんのお手伝い、支援をするのも社会福祉協議会の役割だと考えており、この地域保健福祉計画の中でも社協の役割は大きいと思っている。

○委員長

教育振興部長に、子どもの観点からの意見をいただきたい。

○委員

教育委員会という視点から見ると、地域保健福祉計画では、子どもの健やかな成長を阻害するような要因を排除していくという面と、子どもが将来の担い手として地域福祉を支えていく存在になっていくよう推進するという面から考えるべき。

東洋大学には期待している。東洋大学に限らず、学生が日常的に地域の中にいる状態をつくり上げるということでは、区内にある大学の学生が、文化センターといった区民施設を使う際に、本来の文化団体の利用を圧迫しない範囲で、利用料の軽減や優先予約などを優遇していくことで、その中でのシャッフルが起きるのではないかという期待をしており、今後検討していかなくてはいけないかなと思っている。

○委員長

学校保健、防災の関係で保健所の役割もあると思う。保健所長から意見をいただきたい。

○委員

公衆衛生の目的は、区民アンケートでも回答が多かった、健やかに安心して暮らせるまちをつくっていくということだ。公衆衛生においては、まずは正しい知識を普及していくということも大事。また、健康寿命を延ばすことも目的としているが、死をどう迎えるかということも、公衆衛生の立場でも避けて通ることができないと考えている。

○委員長

公衆衛生と関連して、歯科医師会から意見をいただきたい。

○委員

かつては保健所で子どもの歯科検診を行うと、虫歯の子が多かったが、親の関心の高さなのか、今はもうほとんど虫歯がない状態である。一方で、固い物を噛ませなくなったせいか、非常に歯並びが悪い子がいる。そういったことを知識として情報提供していかないといけない。

○委員長

防災に関連して、障害者団体から意見をいただきたい。

○委員

防災について、いつどのときに起きるかわからない。とにかく助け合わなければならない。

4 施策体系案について

施策体系案について、健康福祉課長が説明を行い、以下の意見及び質問があった。

○委員



施策体系案の基本目標1「健康でいきいきとした地域社会づくり」の、「こんなまちにしたい」に「高齢者も活躍できるまち」とあるが、高齢者の活躍というのは、「現状」のほうではないか。自治会活動にしてもさまざまな活動が高齢者によって支えられている。もっと若者と一緒になってできるまちにしてほしいというふうに直していただきたい。若者がもっと積極的に参加できるようなまちづくりしていただきたいと思う。

#### ○委員

地域包括ケアシステムの強化のための介護保険法等の一部を改正する法律案では、自治体の縦割りになっている制度や相談窓口を包括化していくような努力義務というのが課せられる。このことを意識したほうが良い。また、外国人コミュニティのサポートなどは、10年後には相当大きな課題になってくるのではないかなというふうに思う。

#### ○委員長

現計画の評価、今回のワークショップ、アンケート結果、本委員会の委員の意見及び国の動向を踏まえた上で現計画の検証をし、評価し、新たな事業、必要であれば次の計画、つまり我々のこの計画の中に盛り込むということが大事。その上で、例えば短期、中期、長期という、三つぐらいに区切って、しかも各事業でのモデル地区の中でのパイロット事業を、さらには役割分担。ここの部分は区の行政だと、ここの部分は社協だと、いやここの部分は民間の事業者じゃないかと、商店街じゃないかと、あるいは区民じゃないかという役割分担とか、連携などを示していくと、地域保健福祉計画という具体性が出てくるかと思う。さらに、区の社協の活動計画とどうリンクさせていくか。

#### 5 計画策定スケジュールについて（省略）

#### 6 閉 会（省略）